

出会い (9)

——フランスへの旅立ち——

奥村 一郎



1. 二つの節目

誰の人生にも、その方向を決定するような出来事がある。私にとって、二つの出来事が今に至るまでの生涯の歩みを方向づけてきた。すでに、本誌の紙面で取り上げてきたことだが、まず第一は、禅仏教からカトリックへの転向、第二には、洗礼後、まもなく、カトリック教会のなかでの伝統的な修道会カルメル会に入会したことである。今回は、その第二の節目となった出来事、すなわち、カルメル会入会について、前号の記事を受けつぎながら、それに続くいくつかの主だったものを取り上げてみたい。

2. 二つの道 —結婚か修道か—

前稿の終わりに書いたように、父にとっては思いがけない、いや、全く訳も分からないカルメル会に入ることと、そのためには、遠いフランスに行かなくてはならない、という私の願いを不思議なほど落ち着いて受け入れてくれたので、事は、まずまず、スムーズに運ぶかと思われた。しかし、その後の事情はそれほど甘くなかった。私の洗礼については、父母にとって、それ程の驚きでもつまずきでもなかった。というのも、母は熱心な仏教信者でもあり、父もそれなりの信心を持っていたからであろうか、意外に易しく修道会に入る願いを受けてくれたのも、その信心を深める道ぐらいに受け止めていたのかもしれない。また、私を通して、幸い著名な禅僧、中川宋淵老師を知り、心から尊敬していたので、仏教の出家のイメージがそこにオーバーラップして、つい、うなずいてしまったのか?! というのも、それから、折々に、「俺はあのおときお前にだまされた。お前が結婚していたら、今ごろ、可愛い孫もあり、こんな貧乏暮らしもせずにはすんだのに」と、話の間などに、わたしの親不孝を咎めたりした。確かに事実はそのとおりで、返す言葉もない私を見て、そんなとき、母はわたしの好物のあられとお茶を持ってきて慰め、励ましてくれた。はじめは、母も熱心に結婚を勧めてくれたが、私の方向が変わらないのを知ってからは、一度もそのことで悔やんだり咬いたりすることはなく、いつも温かく静かに見守っていてくれた。

実際に、結婚は神に祝福された人類の命にかかわる、聖なる人間の常識である。「産めよ、増えよ、地に満ちよ」(創世記1.28)、

「男は父母を離れて女と結ばれ二人は一体となる」(創世記2.24)と神は言われる。

本人の私とても、結婚が嫌で修道院に行く訳ではない。まして、失恋などとは、凡そ縁がない。他方、心惹かれる女性に出会うときには、いつも一緒にいたいと思いながら、何かしら、私をそこから引き離していく力に逆らうことができなかった。そのころ、親しい友人の家族と結婚の話が進み始めていたときに、先方のお父さんから尋ねられたことがある。「奥村さん、どうして、そんなに、この世をはかなまんといかんのですか?」また、別のときには、「わたしは、神父になるために、これからフランスに行くことになっていますので...」と言うと、「神父様になられるような方でしたら、もっと有り難い。ぜひ、わたしの娘をもらってください」と言われて当惑したこともあった。

横浜から発ってフランスの港マルセイユまで、三十日の長い船旅を共にしながら、親しくなった外交官夫人が話にこられて、「奥村さん、修道院に入るなんて、勿体ない。是非、結婚してください。私がお世話します」と言われた。今になって悪魔のすすめとは、と思った訳ではないが、「ハイ、結婚します。マルセイユに着くまでに、マリアさまのような女性を紹介していただければ喜んで」と答えた。

カトリックの修道的独身や神父の福音的独身というのは、世をはかなむことでは、さらさらない。それどころか、キリストの愛によって世直しするために全生涯を神と人々に捧げ尽くしていく愛に由来するものである。その独身は結婚を否定するものではなく、いわば、神の愛の竜巻に人間愛が吸い込まれ、巻き上げられてしまふ、人間のみにありうる生き方である。そのことからして、カトリックの修道的独身は仏教の出家以上のものである。満行して悟りを開くまでの出家修行ではない。むしろ、結婚に近い。ここでは、世間的に立派なものになることが目的ではなく、心身ともに二人が一つのものになって愛の家庭を築いていくことが第一のことである。それと似て、修道生活は皆が一つになって神の家族を育てていくことにその目的がある。だが、人間の家族なしに、修道家族もありえない。事実、カトリック教会は、健全な人間家

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンズ宗教研究所）など多数。

族を生み育てる聖なる結婚と、その結婚から咲きでる修道家族によって成り立つ。その意味でキリストの教会は、神が人間と出会う聖なる至高の愛に燃え尽きる場である。「友のために命を捨てるほど大きな愛はない」（ヨハネ15.13）とイエスは言う。結婚生活においても、修道生活にあっても、人間の尊厳と救いはそこに尽きる。「愛と死は同意語です」と書かれた、東京女子カルメルの院長シスター・ジェルトルドからの手紙を受け取ったのは、丁度、マルセイユの港についた時であった。

3. われらのおやじ

ーやっこ洗礼、やっこ神父、やっこ聖人ー

貧しい中で、多くの人に助けられながら、遠い外国フランスへのはじめての旅立の準備も、なんとか調ってきた処で、せめて、まず、幾人かの身近な恩人や友人にお別れの時をもちたいと思った。そこで、まず、お二人の神父、すなわち、洗礼の師父である下山正義師、そして、例の聖書研究の集いを通して熱心に指導してくださった、ドイツ人宣教師のナーベルフェルト師、それに、大学時代からの友人二人 --先輩の船山君と無二の親友であった山根君--を加え五人でのささやかなお別れ会をもつことにした。ところで、下山師は部屋に入ってこられるなり、私の肩を叩きながら大きな声で、「おい、奥村、お前は、やっこ洗礼、やっこ神父、やっこ聖人といか」と言われた。以前には、「おい、奥村、嬢の末よ、改心して洗礼を受けよ」と、やられた。とにかく口の悪いこと、それでも、「われらのおやじ」として多くの人に慕われた司祭であった。そのときも、一本グサッとやられた感じ。しかし、考えたら、「やっこ聖人」までもいきそうにない。では、「やっこ罪人」かと言うと、そこもうまいかない。というのは、「罪業深重、地獄一定の身なれば」という、親鸞上人の境地にもほど遠い自分を見るからである。「熱くも冷たくもない生温いお前を、私は口から吐き出す」（ヨハネ黙示録3.15-16）と聖書にある。愛は本来、中途半端をゆるさない。その事を痛いほど知りつつも、七転び八起き、いや、八転八倒の人生は今もって変わらない。一昨年帰天された、懐かしい「われらのおやじ」下山師の愛の叱咤がまた天から響いてくる。神に感謝。



フランスに出発したときのマルセイーズ号（1951年当時）

写真展のご案内

1979年にオープンして以来、フォト・ギャラリー・インターナショナルは国内外の写真家の作品をご紹介してまいりましたが、おかげさまで今年で満20年を迎えます。これまでの20年の歩みをまとめる企画として、以下の日程で20周年記念企画展「Harry Callahan : 50 photographs」を開催致します。



© Harry Callahan

虎ノ門 — 4月5日(月) - 5月28日(金)
* 4月29日(木) ~ 5月12日(水) 臨時休館
20周年記念企画
ハリー・キャラハン 作品展
「Harry Callahan : 50 photographs」

6月2日(水) - 7月9日(金)
小川隆之 作品展 「魂のメサ(台地)」

P.G.I. 芝浦 — 3月19日(金) - 4月28日(水)
吉田友彦 作品展
「砂山の砂 - 近くにあるのに見えない場所」

5月11日(火) - 6月19日(土)
杉山守 作品展 「A Silent Noon」

— フォト・ギャラリー・インターナショナル(虎ノ門)
東京都港区虎ノ門 2-5-18 Tel. 03 3501 9123
月 - 金 11:00 - 19:00 土・日・祝 休館
地下鉄銀座線虎ノ門駅下車 2番出口より徒歩5分

— P.G.I. 芝浦
東京都港区芝浦 4-12-32 Tel. 03 3455 7827
月 - 土 11:00 - 18:00 第2・4土、日、祝 休館
JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分
ゆりかもめ 芝浦埠頭駅より徒歩15分

表紙の写真

Robert Byers 「Graffiti, Isleton, California, 1994」

ロバート・バイヤース作品

写真は風景やものを忠実に再現する技法として活用され、親しまれていますが、写真アートの世界では、色彩をモノクロームに変えて抽象化したり、立体を平面的に見せたり、また、この作品のように朽ちた壁や「らくがき」などのイメージも写真表現のモチーフとして用いています。